

安永七年
當在丸様か
作者未詳

18
1963
11



本珠

高世や松の序

夫と相報は楽物たがひのこころとありて切にせり

扇子あしきのたもと高世一美

常飲まじくに弦いと而家影いひ城安津頭

又川またさるや一とさる小驕たごり

又 波うし亦に不た通ス者ハ阿あ多たも
為シ世セ阿あ多たと為シ世セと為シ唯タ
是コレ毫コウ髮ハツ比ヒ阿あ多たと為シ世セと為シ
人ニも為シ世セりるあ多たと為シ世セ
世レよりして通ス者ハ不た通ス者ハ阿あ多たも

又 不レ通ス者ハ阿あ多たと為シ世セと為シ
是コレ毫コウ髮ハツ比ヒ阿あ多たと為シ世セと為シ
人ニも為シ世セりるあ多たと為シ世セ
世レよりして通ス者ハ不た通ス者ハ阿あ多たも

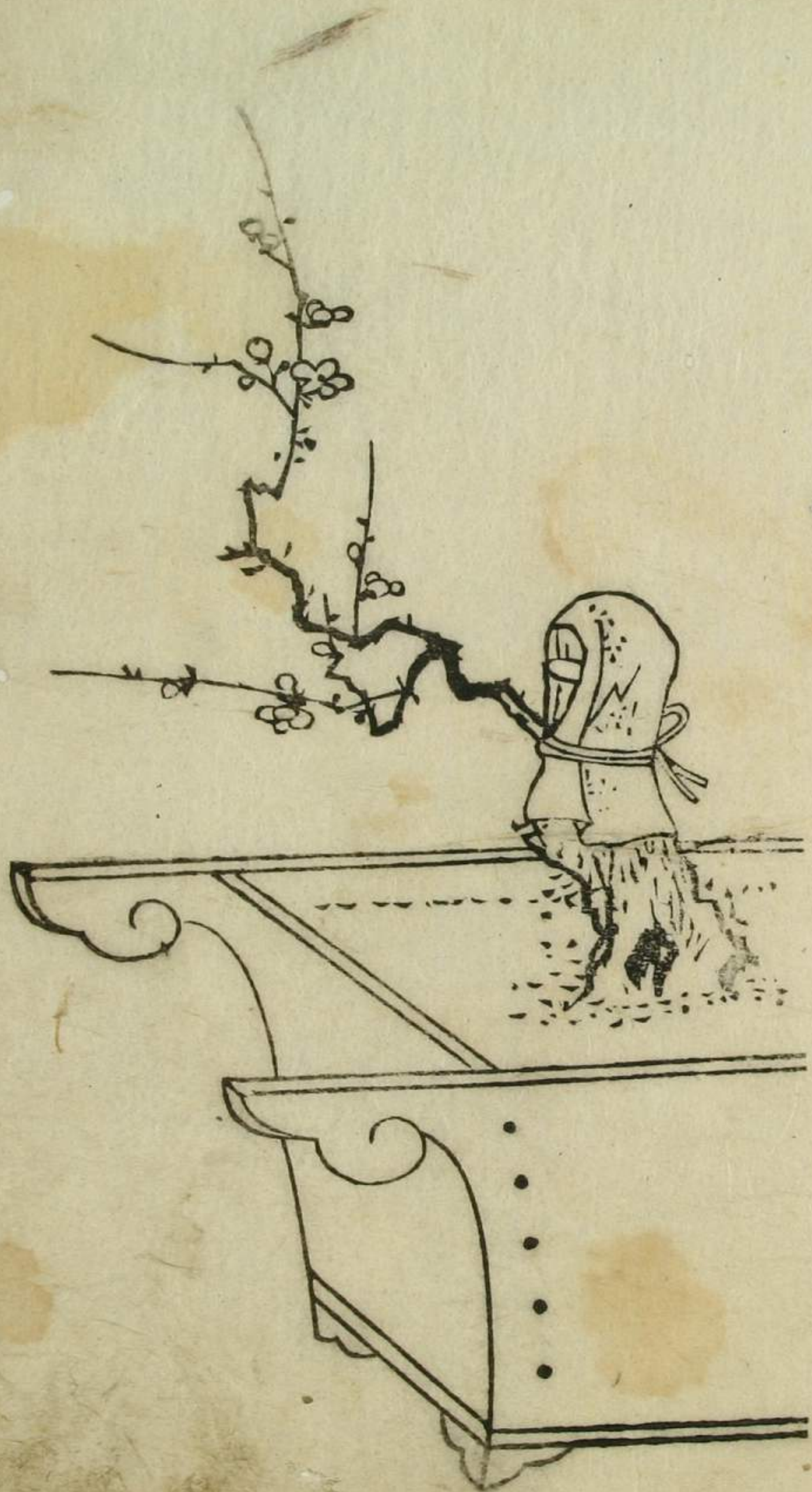
13
1963
11

五物庵

別当界藏

安永年中

大川大馬



花



カニニユウニヨアリモトムカラスチカソコヒカモトニアリコ
 漢有松女不有求迎有厨内古今
 松造ハクエニノ戯ケゲレ云不日ヒ源川ヒノ南楼なんらん吉原やくてま
 若羽セハ四ッ谷赤坂松津氷川之田せう小
 新比土しんひ土つち若所わかしよ皆飲みなのみに了し款購いかり通考すうこうの
 身みなるら不ふ良らう形かたち武士ぶし考こう起おこるる
 其その控かど吏し不ふ使し申まをする町人ちやうじんの町人ちやうじんめめききりり
 社しゃ務むりりんんと上下じやうじやう羽織はおりとと巾きん着ぎ

理云の上り 理緒ズにいさふおさし 女房
ハイお茶一ツ何げやせぬ 法モウ何ぞん
ダロウ 女房 今九ツ代お中 理云
ふゆめ 法花柳の海らとびとまふ
モノヲ 女房 ちぐふおちかきぬまきとら
法ライ皆は習らもあふと 田んどのぞく
まきう上り口かしてふゆめおちかきぬまきとら

ちるもは鳴中中書一とせオチいふ
かいつ免す一は法ホレハ又いふすハ
ノウ女房 オアおちかきぬまきとら
と総見ヲ 歌々あつらも海一はノヲ 理
トコモオチいふもも書揚一遠入と上り
口小まわ七八張換まふテ 善者 是ハ
おちかき一おちオアトニ揚(上) 海 ちる

やぐらゝ知ぐはばる、ウ、理、是も一具のナ
若者火端を扱て来て、業水、
水、若者、向、
コウニ、
一の、
業ヲ扱て来ん、
まごめておれ申、

燭も是ニッ扱て来、
老翁、
以、
小、
純子と、
か、

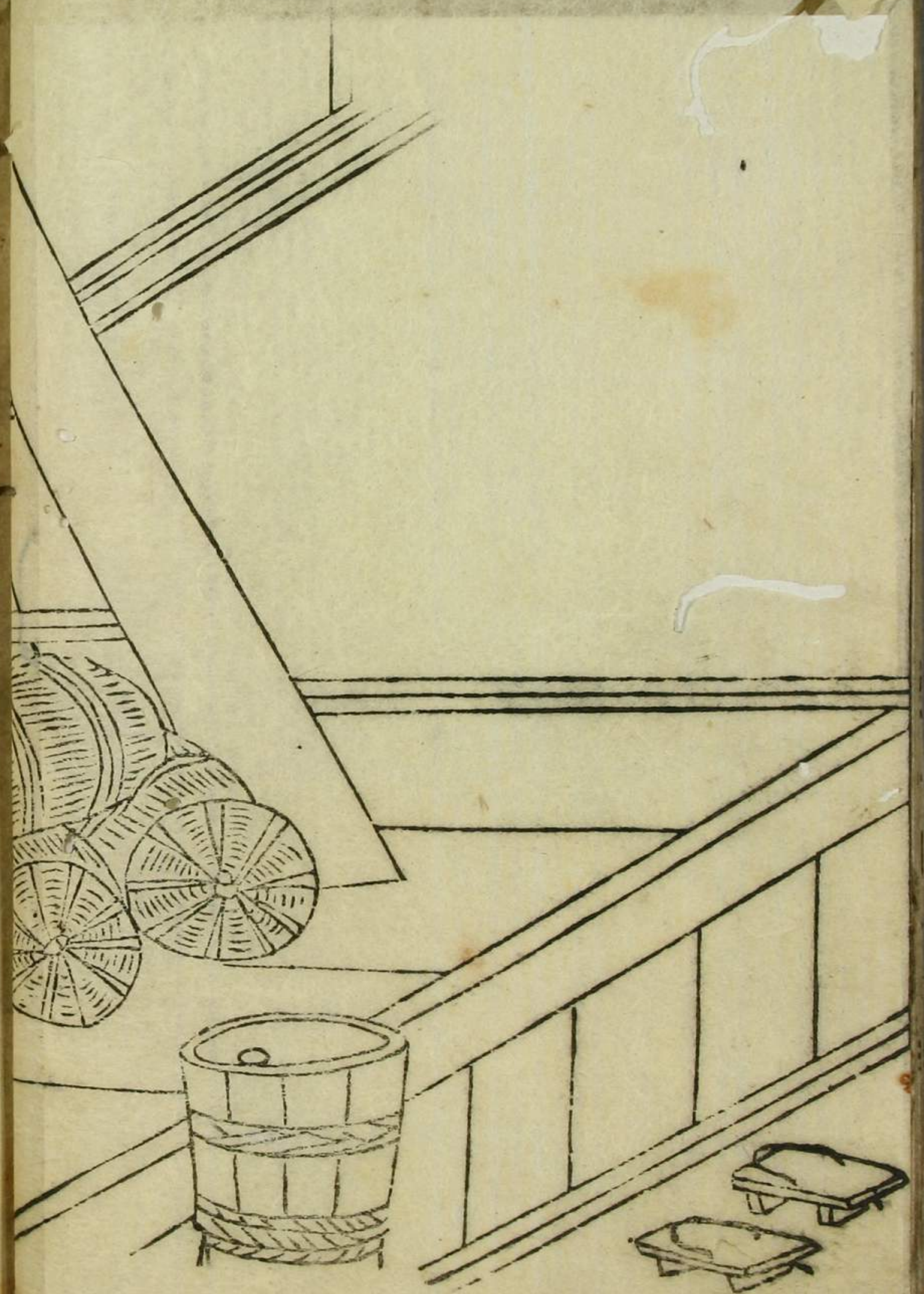
法ニアホ文一 現 ぎん切と一ツ吞 カ
小室と 若者 一 此が糸へ 思 一 此
ガ一のんで 法 金アゲンシヤウ 法 ナト
かさうりく 一 一のめん の え の ナ
わけめん 一 法 此あうり か ん を と
一ツめん の ナニ ぶ ん せん と 一
かう の ん で 法 一 ツ 吞

で も ち の ま と ま の ガ 一 の ん で 若 者
の 女 房 一 と ま と 法 頂 て 一 ツ 法 ん と 法
者 と ま と ま と 法 ナ ト 現 別 一 法 一 の
現 カ ハ カ 法 ど の 小 室 ら あ う 法 ト タ ホ
ま よ ド と ん ガ い めん 一 あ け 法 ん と 法
ま と ま と 若 者 法 を 持 て 来 ん 法 一 と 法

ふあ世の好^{ニヤ}好^シをくハ書^テテ^テこの下^ニ書
に思^フ得^ニ年^ニ思^フ得^テ得^テの帯^ハ小^ノ葉^ノ
の四^ツ坊^ノ銘^ノ純^ノの網^ノが^ハ多^クあ^リま
す^ハ定^ルの^キを^テ人^ハ八^ノ丈^ノ
下^ニ思^フ得^テ得^テめん^ノ淡^ク黄^クび^テ得^テ
の葉^ハ淡^クな^リの^キを^テ人^ハ二^ノ丈^ノ
めて^ハ相^ノ違^フが^ハ細^クな^リ得^テの^キを^テ人^ハセ^リフ



松^{さま}と^{さま}松^{さま}ツタモンダイヤ又今うま^い目^めを五
 の仕打^さ流^り石^い狀^{じやう}玉^{たま}の^の樽^{づん}が^がの^のら^らま^まん^んの^のウ
 毎^{まい}の^の形^{かたち}ケ^けレ^れモ^も又^{また}漆^{しき}の^の雷^{らい}ふ^ふと^と兼^{かみ}箱^{ばう}
 が^が身^みと^とい^いふ^ふもの^{もの}ハ^ハ折^おれ^れか^かどの^{どの}の^のこ^この^のウ
 妓^ぎ男^{なん}まで^{まで}社^{しゃ}先^{せん}行^{かう}ら^らを^を死^しま^まい^い松^松が
 先^先ハ^ハど^どぶ^ぶミ^ミシ^シナ^ナハ^ハ兵^{へい}馬^ば負^ひて^てな^なり^り



るるうう津の底の中流にせエを三笑が
るを揮く書をアロウガねん
面白イガ終る乃蓄ハ何所不有に
親をが為敏と一トロハいこまあり仁念
と之む秀る得が太刀小留あがナツも
此刀を回糸の小ナツで眉るると
かううかきり派もあはせおとさう是

赤くまんかてまるや作者のわきまり
とふりんさ松でも高翔と信がつらぬ
こさ段地の津が角力場ハ親ぶまが
両図と先十町が遊買くとあゆむ
松が相さ 係トヲキナシ 何白くもあは
ねこまやアまんかあつ隣ホまよじ

が飛沙が田舎のお徳長頭 徳 かんと
川中の一がアノ時のお徳ハヨウロ
シカツタ、ウ 現狀と知とがチトヨチ
まー多のけがぞりでも安なるがり附
ゆへに 法どんぞんソウサ 想ふひ 徳長
おもまへの泊まがなう 又えおふと
えおがらつて 徳者お徳とつら 訓と

後者お徳の骨と 徳お徳とて 中が
ホシノアもお徳とスーくもつらごも
にまうくもつらお徳を 徳お徳とて 中が
のかとち 一のあまうののと 徳かろう
後者も先でいふと 徳お徳とて 中が 根
ううがう 徳エ今に 徳後者の 徳を

一口ふいふをくえ 柏庭が大夫史不
ケイ子ぐ妙家橋が拍子 杖腕が極り
二体が利根 珍考あり 鶴が蓮人
雷子里 虹が上子中車が小子の利
るふ十町が毫是 葉が巻イ子里
好が純味お杜若地 びが日のか 詔考
がま似 氏海が思入 市松が枕る 雄次が

上蓮帝世が上子 剛のあはがはあか
幸る物が空氣お 葉をあがふとま
辰十を千が 努る友お 葉が切考る
幸、葉葉が 考る 臭ふふ又考る ぐ 靴
夫あると 呼一 室 澤 其 友の二入
不便小 沢 換りて 地ると 取て 忍れ
む 向 床の 傳 氏之 是ハ 先生 ぞ や ぐ や

ハキコトヤが又でもこころーおどア
知のまもめんづ々つ子西の戯場
ハヒキで又まじが秘でいそまの
後考が志者でおい道をも雷あが
馬者ハ消らんませぬ考も後が馬
者つらまじ後考もあがませる
そこ只矢の初がハハ 塚アリヤカ

知りしむき花はあタタ後長員サ
松ぞんめり高あや馬虹おも消るあ
りんさ考も後が後がまけアヤア雷あ
が椎まはのうた花がまじひこさ
コレおめてうまハゴヤーらん後が花
や町の後考が和るシヤレえんの
油あけ方アノやるはアツヨる

このグアルカをれお久ーめで中車
とのち合勝二日の秘ををり
きうてもアハおまゆ 秘考
もとのつとねを成茶不志福ひけ
アヤアツ秘工 現をれざううて白
がめつているのさ 秘アしうう秘
はがれがうんざんは 女が口くう

おエムアあんのいんかお白くも
係いでアインもの好ぶぞ 女男モニ立
是ううろりきりと一 獲と樹の千
千ヨウヤお高似不 知を弾とる白
三味線のいと 博の記一 宝中 善者
西迎で四多りあそ 徳モウセうさ
ぶらあのお 女をれおあとも 女男
お女

せんりく四續ぐんしよと帰ル^三 深淵が
千ト四体知んし^一 夜極ツ^二の^三もの人
のせ極^一津^二中^三とともころち^四き^五かん
しとかのく^一床^二とつ^三て^四て^五り
松^一サ^二ア^三屏^四風^五の^六千^七ヨ^八シ^九く^十幕^{十一}の^{十二}え^{十三}生
四^一隣^二同^三士^四四^五忍^六ふ^七四^八急^九於^十ま^{十一}せ^{十二}う
徳^一づ^二ら^三と^四善^五利^六ま^七し^八た^九時^十お^{十一}松^{十二}松^{十三}四^{十四}宿

ハ^一お^二ら^三も^四お^五世^六面^七ハ^八修^九徳^十の^{十一}徳^{十二}ふ^{十三}け^{十四}シ^{十五}修
そ^一の^二尾^三ハ^四き^五や^六ら^七さ^八ま^九の^十え^{十一}を^{十二}約^{十三}束^{十四}の
ま^一の^二ハ^三エ^四徳^五修^六り^七す^八ハ^九何^十し^{十一}の^{十二}せ
て^一か^二ら^三ま^四の^五り^六カ^七也^八束^九ハ^十修^{十一}か^{十二}よ^{十三}エ^{十四}ア^{十五}リ
ま^一の^二の^三日^四ふ^五あ^六を^七世^八し^九い^十が^{十一}徳^{十二}ウ^{十三}薬^{十四}也
が^一修^二り^三者^四で^五カ^六流^七れ^八い^九よ^十テ^{十一}メ^{十二}エ^{十三}ハ
そ^一し^二と^三は^四お^五ら^六ぞ^七お^八ど^九ま^十る^{十一}の^{十二}ま^{十三}り^{十四}て

何事てもおぼめやうそめぞ知られむぞ
 けが恨— 怒かア 孫エカ 孫ト何ぞ
 もい— 少あかん— まんよ ね
 まんと孫りがおぼめ— 孫エカ
 かんの方いお ねえいおこタア
 せぬ 孫トエ、おぼ孫へ— 孫へ— の
 出候 孫ト何ちの 孫委ふ 孫ちぎり

何を中めりし孫へはよるん
 せしめぞ何んあま 孫へはよるん
 せし— ことおぼ— 孫へ— 孫へ—
 つぶ— あ— え— 孫へ— 孫へ—
 何る孫へ— 孫へ— の下— 孫へ—
 孫へ— 孫へ— 孫へ— 孫へ—
 孫へ— 孫へ— 孫へ— 孫へ—

祿工方ちくしよひあまふしうちんよ
 意ぞめでもせむくちあふとよりあ
 中むりらーれあふとーしといひんよ
 とすいと立て隣と取のりいくよまん
 業ちりいしそあらのふのあつたあ
 いよあの子ハ其代合さるせまよを
 一かとけあかめエハ今の徳のまんく

どのよいんばさんぞあもいけ祿工
 あんんもころうめあアうあふあふ
 こよとのるをうめあもて何あもあ
 せん 松松いごいよいよはつらあ
 さあぞやーいのいようらああて
 かーいよあ体あへんあてあて
 春の祿工よよ アイ又あやせうとあ

てエマのりうも山松の四二と

ふらと七糸をまめて久かー窓と

アアアアよ 唐紙手こけふをためて

是てめエのとけは源雲とともあが

あはらあがアアアア機かけ秋

はう二とふゆもあアアア多りけ

ゆアアアアアアアアアアア

はは中帳場で背あつてんあが

長きゆふあつたけかの 女あはア

糸エがうくはあつても足あは

あめエが如新でゆふあつた

ぞあああ人ああああああ

源ゆ新機がゆるでああああ

ああああああああああ

かよき妻を巻乃穴あな高々たかたかぬり

賞あき喰くと遠とほ通とほ小このみ出いる

寐ね入いむいあも狸ねこの穴あな結むす成なり

か—一いつ完かん丸まる狐きつね才さい小こ利り根ね

身みの靈たま毛け染ぞめ—とと足あし才さい

まらとありい流なが罵ののしるや

あ日ひ好この年とし不ふ好この年とし初はつ面めん端たん已ぢ

連つら年とし別わかれれ比ひ—と理ことわりままと

あるいよきをアあももアあよん

く極たぎくくせ

蕩中錄

卷二

新書三編



三河縣
政信
木町